
Revenge and Peace

赤47

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e v e n g e a n d P e a c e

【Nコード】

N 1 2 7 4 B

【作者名】

赤 4 7

【あらすじ】

主人公リョウは謎の武力集団W・U・Fに過去の事件の復讐で長い間一人戦っていた。それが信頼出来る仲間と出会い、共に戦い、あらゆることを越え勝利し、最後に一番大切なことに気づく。

流浪の男（前書き）

初めての執筆です！至らないところも多いと思いますが、よかったら楽しんでください☆

流浪の男

赤く世界を取り囲むような炎。周りの家々は音を立てて崩れさり闇を染める炎となる。

揺れる視界の向こうには刀を持った男が、傷ついた男性を無表情に切り裂いた。

必死に隠れようとする女性の重みに耐えながら、少年は思考のすべてを恐怖に支配されていた――

男は苦痛の表情のまま目を覚ました。額には大量の汗が筋を作り流れていた。

険しい表情ながらも、少年の時の面影が残っている。あの時出来た腕の火傷と共に。男はベッドから降りると、冷蔵庫で冷えている水をコップに注ぎ、飲み干した。

「やっぱ慣れねえな」

そうつぶやくと、男はシャワーを浴びに浴室へ入った。いつも仕事をしたその晩は決まってあの夢を見るのだ。

シャワーから出た男は身支度を済ませ、体の半分はあるだろう大剣を腰に差し、チェックアウトを受け、大きな荷物をかかえ街へ出ていった。チェックアウト済みのチェックを付けられた欄には、リヨウと書かれている。

宿を後にし、大きな荷物をかかえ、人混みの中心へと歩いていく男、リヨウは駅へと向かっていた。

この街は、この地域の中心部なのだろう、人が多く、周りには背の高い建物が多い。

リヨウは、人の多さに影響されることなく、目指す方向へ進んでいた。

すれ違う人達の話題は一樣に同じく、昨日この近くで起こったことについてだった。街頭の大型テレビでも同じことのニュースを流していた。「昨日の午後5時頃、プレシア郊外の丘にある、認定武装集団W・U・Fのプレシア本部基地が何者かにより爆破された模様で、W・U・F基地を狙った連続テロとの関係があると見て、現在治安当局が調査中です。」

「中央政府がこんなこと調査するはずがない。」
リヨウは小さくつぶやいた。

ひたすら駅へ向かっているこの男リヨウは、この事件が起きた午後5時頃に現場にいた。なぜならこの事件はリヨウが起こした事件だからだ。

駅に着くとリヨウは、「プレシア発ービシン行き」のチケットを買い求めた。

「まずはビシンで情報集めだ。」
リヨウを乗せた列車は、定刻通りビシンへ向けて出発した。

プレシアからビシンまでは早くても半日はかかる距離だ。まだ疲れの残っているリヨウは、一等車両に乗り込んだ。

どこかの企業の社長が座るような広々とし、長時間の旅の疲れを腰とお尻に感じる事が無いだろうと思える柔らかさとフィット感を持つ座席は、早速リヨウの眠気を誘ったが、リヨウは窓の外の流れる景色を見ながら、これからの事を考えていた。

「もう一人でやるのは限界に近いな。向こうも対抗策を考えてきているし…」

リヨウには珍しく弱気な発言だった。
列車のスピードがあがるにつれ、外の景色は人の見えない草原へと進んでいった。

リヨウは気がつくとも眠りに落ちていた。座席の心地よさ、列車の揺れ、残った疲れは、リヨウを眠りに誘うには十分だった。

また夢を見た。今回は明るい夢だ。光が射している、誰かの笑う声が聴こえる。とても心地よく、とても心強い誰かが横にいる。

前に引つ張られるような感覚でリヨウは目を覚ました。列車はビシン駅に到着している。外は太陽が沈み、薄暗くなっている。

リヨウは見た夢を不思議に思ったが、食べ物欲しがるお腹は夢を考える事を許してはくれなかった。

ビシンの街はプレシア程栄えてはいないが、地方庁があるタイムの隣町なので、地方庁に用事のある人が泊まる宿などが多い街で、娯楽施設も多々ある。建物は背が高いのではなく、道路も石畳で、いろんな所から人が集まって来るのに意外とゆっくりとしている。ちなみに地方庁とは、この世界を統治する世界中央の行政区分の「地方」の役所である。リヨウはこのゆっくりとした空気は嫌いでは無いが、この空気に合わせる気にはなれなかった。まずは、ウルサイお腹を落ち着かせるために近くの食事の出来るところに入った。

どこにでもありそうな料理屋で、愛想のいい親父と奥さんで切り盛りしているようだ。

この店は人気があるのか、お客がよく来る。メニューもすぐ食べられるものも多く、回転が速い。リヨウはそんな客の流れを気にせず食事をしていると、一瞬列車の中で見た夢のような、心地よい感覚に襲われた。

リヨウは思わず振り返った。が、何もなくて誰もいなかった。ただ、

閉まる引き戸の隙間に、腰に下げた茶色で両翼に赤のラインが入ったブイ字のブーメラン以外は。

ビシン

日は沈み、屋根はネオンに彩られ、半月の照らす街ににぎやかさが増していく。

街は太陽に見張られていたかのように、昼とは顔を変える。人々は眠らない、しかしこの街の独特なゆっくりとした雰囲気は変わらず、大きな事件は起きない、不思議な街だ。

リヨウは一番賑やかな通りを歩いていた。食事中のあの不思議な感覚は街の音に消え、今はカラフルなネオンに目を細めるだけだった。

リヨウは今夜を過ごす宿を探すこともせず、一軒の店を目指した。「G advance」通称GA。世界的に事業を展開している貸し金業者だ。しかし別にリヨウは金に困っている訳ではない。

GAは各地の主要都市にはほとんどあるほどの巨大貸し金業だが、本職は裏社会向けの情報屋だ。最初は貸出の際の身元情報を買っていたと言われるが、今では様々な情報を取り扱い、情報屋の中でも一位の情報量を誇る。

酔っ払いを横目に、角を曲がるとそれはあった。お金の貸し借りだけには大きすぎる建物に、わかりやすい黄色の看板でG advanceと。

リヨウは入り口を通り過ぎ、横の従業員出入り口のドアの前へ立った。会員証を取り出すと、ドアの横の読みとり機に通す。

鍵の開いたドアを通り、secretと書かれたドアを開ける。受付にて会員証と身元の確認がされると、一つのコンピューターの前へ案内された。

ここでは欲しい情報を担当者が探してくれるというスタイルが基本

だが、自分でコンピューターを使って情報を探すことも出来る。リョウはここで一夜を過ごすつもりだった。

調べることはW・U・Fのことだった。

W・U・FとはWorld Unify Force（世界統一化軍）のことで、世界各地に本部基地と本部に属する支部基地がある巨大な武装集団だ。

名目上では中央政府の有事協力・治安維持活動への参加ということで認定武装集団に指定されているが、実際はテロ活動や反中央勢力への荷担などをしており、真のWUFの最終目標は世界中央に変わる世界統一国家の樹立とされている。

リョウはこのWUFを破壊するために旅をし、各地の基地を壊滅させているのだ。

なぜリョウがこのようなことを行っているかは、彼の過去に関係があるようだが、自分の過去を人に話さないタイプなので理由を知る者はいない。

ふとコンピューターをいじるリョウの手が止まる。

「これか…」

次の仕事が決まったようだ。

ビシン2

夜が進み、朝に近づく。ビシンの街は太陽の気配を感じ、静けさを取り戻しつつあった。

人々の家路につく姿が見られるようになると、ビシンは昼の顔に戻り、何もなかったかのような表情で太陽を迎える。

リヨウはまだコンピュータと向き合っていた。

次のターゲットは決まったのだが、肝心な基地の内部構造、兵の数、保持している兵器などの情報が見つからないのだ。

リヨウはふと時計に目を移した。時刻は朝を迎えていた。

リヨウはため息を一つつくと探している情報を紙に書き、席を立った。

受付まで戻るとその紙を渡し、

「これを調べておいてくれ、また後で来る。」

そう告げると、その場を後にした。

外に出ると街はもう明るかった。眩しい朝の陽に、疲れた目をこすった。

通りを歩いていると、地方庁に用事のある人達がタイムへ行くために駅へと歩いていた。

リヨウはどうやって情報を手に入れるかを考えていた。今までいくつかの基地を破壊してきた、その為WUFも対抗策をとってきている。その中で情報が無いまま突っ込むのは、自ら網の中に飛び込むようなものだ。

「少し滞在することになるな…」

リヨウはホテルを探した。

この街で宿を見つけるのは難しいことでは無い。リヨウはとりあえず目に付いたホテルへ入った。

どこにでもあるようなホテルで、値段も妥当といったところ。旅行目的でなく、用事の為に泊まるには充分だった。

部屋に入ったリヨウは、一晩中コンピューターをいじっていた疲れを取るために、少し仮眠を取ることにした。

「一度基地を見てみるか…」

次のターゲットの基地はタイムの向こうにあるコッシュという街にあった。

コッシュ支部基地

リヨウの次の仕事場だ。

情報を求めて

W・U・Fコッシュ支部基地。

スール共和国コッシュの外れの小高い丘にある、ルコラ本部に属する支部。

規模はそれほど大きくはないが、滑走路を一つ持っている。兵器研究が盛んと噂されるが、実際は不明。

ちなみに世界は、世界中央の中央政府によって支配されているが、近世になって力が弱まり、各地の統治を自治権の貸与という形で委託し、形を留めている。

スール共和国もそんな自治体の一つだ。中央政府は国として存在することは禁止しているが、忘れ去られたルールだ。

リヨウは目を覚ました。窓から射す陽が赤みを帯びている。ビシンの街は太陽が眠るのを今かと待ち、騒ぎ出す準備を始めていた。

リヨウは身支度を済ませると、暗くなり始めた街を中心に向かって歩きだした。

リヨウの向かった先は何時間か前までリヨウがコンピューターと睨み合いを続けていたGAだ。頼んでおいた情報を確かめに来たのだ。

リヨウは期待はしていなかったが、一応来てみた。

情報はいくつか調べられていた。リヨウは期待していなかったのので、思わぬ収穫に心の中で喜んだが、自分が一晩かかっても見つからなかった情報を、ほかの業務をこなしながら見つけられていたのが、リヨウには悔しくもあった。

リヨウの自尊心は高めた。今まで一人でいろいろこなして来た自信から来ているのだろう。

リヨウは情報料をクレジットで支払うと、GAを後にした。通貨単位はギルド（G i l l d）で、GAのGはギルド。

けたたましいベルがビシンからコッシュへ向かう列車の発車を知らせている。

リヨウはその列車の中にいた。まだリヨウにとっては情報が足りない、実際にコッシュに向かうことにした。

コッシュへ向かう列車はこれが最終列車だった。

まだ空が暗くなつてそれほど時間は経っていないが、中央政府の直轄領である国衙領^{こくがりよう}のビシンやタイムから、スール共和国のコッシュに行くには国境での入国審査が必要になる。しかしスールの入国管理局は、この列車が国境を通過する時刻以降は業務を終了するため、この列車が最終となる。

コッシュは一言で言う何もない街である。同じタイムの隣町のビシンとは違い、栄えていない。夜にコッシュに着いても宿が探せるかさえ難しい。

しかし、街に数少ないパブへ大人が集まり、酔ったその大人たちから情報を聞き出すには丁度いい時間なのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1274b/>

Revenge and Peace

2010年10月21日20時25分発行